

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12502

研究課題名（和文）近世村落文書の目録再編成による地域情報の構造分析

研究課題名（英文）Structural analysis of the local information by the list reorganization of the early modern times village document

研究代表者

東 昇（Higashi, Noboru）

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：00416562

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：近世の庄屋文書について、日記本文のテキスト化、大規模文書の目録の再整理により、情報の構造を分析した。肥後国高浜村の庄屋上田家文書は、3か所に分散し、未整理の天草口ザリ才館所蔵文書の目録化を実施、上田家資料館所蔵文書と内容比較を行った。また上田家資料館所蔵文書の中で上田宜珍庄屋期（1789-1818）を対象に文書の一括状況を中心に再調査を行なった。その結果、近世後期における、高浜村の村民、孝子褒賞の過程と行状編纂、文書群の形成過程、文化15年（1818）における日記と御用書留帳、出勤録に記される内容・文書写を分析し、庄屋が収集した情報の大系の実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

総計1万点を越え、分散する近世文書を再整理し、村の孝子褒賞の文書群がどのように形成されるのかあきらかにした。同年代の庄屋日記と御用書留帳、出勤録を比較し、文書間の連携、庄屋が収集した情報の大系の実態を解明した。論文化した研究成果を、上田家資料館が存在する地元の天草市高浜地区振興会広報誌のコラムとして掲載し、WEB公開することで広く周知できた。また未整理の天草市立天草口ザリ才館所蔵文書の目録を所蔵館へ寄贈することで、天草市における世界遺産関連などの調査・研究に寄与し、地域へ研究成果を還元することができた。

研究成果の概要（英文）：This study has shown that the structure of information on early modern Shoya documents was analyzed by converting the text of the diary text and rearranging the catalog of large-scale documents. The documents of the Shoya Ueda family in Takahama village, Higo province were dispersed in three places. Furthermore, the unorganized documents in the Amakusa Rosario Museum were cataloged and the contents were compared with the documents in the Ueda family museum. In addition, we re-examined the collective status of the documents in the Ueda Family Museum collection for the Ueda Yoshiuzu Shoya period (1789-1818). As a result, we analyzed (1) the process of Koushi and the villagers reward, Gyozyo compilation, and forming a group of documents in the latter half of the early modern period, (2) the contents and copies recorded in the diary, Goyo-Kakitome-cho, and Syukkinroku in 1818, then, clarify the actual condition of the information collected by Shoya.

研究分野：日本史

キーワード：地域情報 文書目録 編成記述 日記 天草

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 記録史料学研究との接合 日本史研究者、特に近世・近代史研究者にとって、史料整理は研究の基盤といえる営みである。史料整理は、戦後の主題分類から 1990 年代以降の記録史料学の発展に伴い、現状記録などの議論を経て、現秩序保存原則に基づく段階整理が主流となった。また 2004 年日本アーカイブズ学会が設立され、記録史料学研究が進んだ。阪神大震災や東日本大震災などの大規模災害、人口減による持続可能社会への対応として、神戸大学編『「地域歴史遺産」の可能性』(2013)、国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ』(2017)等の成果がある。

しかし、これらの記録史料学研究と近世史研究の接合は少なく、相互の成果を活かした研究は少ない。ここで原点に立ち返り、文書群を再整理し、文書目録の編成記述を行い、庄屋日記を基軸とした村の情報の構造分析を進める。

史料整理の成果は目録であるが、この目録の編成記述に関して、山崎圭「アーカイブズの編成と記述 - 近世史料を中心に - 」(『アーカイブズの科学』下、2003)、国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』(2014)等の研究が進展している。同書において文書整理、目録編成の成果をもとに、石清水八幡宮神人であり商人文書である文書群を分析した。このように文書群の構造認識や編成記述は、近世史料を研究・分析する上で必須の条件となりつつある。

(2) 情報史研究、近世の情報史研究は、これまで幕末や商人・都市に偏っており、村落における情報に関しては、岩田みゆき『幕末の情報と社会変革』(2001)が、名主と情報の関係をまとめている。岩田は、名主とは、領主と村民の間の情報を収集・維持・管理・蓄積・操作を行い、村内、村々の政治的・経済的・宗教的・文化的情報の収集・維持・管理・蓄積・操作をする、できる立場にあったとする。しかし、この名主(庄屋)は領主と村民の間の村方情報を、収集・維持・管理・蓄積・操作するとしている。これらは各情報の実態は判明するが、生成過程、記憶や未文書化情報について明らかにしていない。この点については、保立道久「情報と記憶」(『アーカイブズの科学』上、2003)の、「日記」とは特定の事柄に関する記憶の同定記録を意味する古文書の形式であって、これが「記憶から記録」への移行の典型的な例という指摘、大黒俊二『声と文字』(2010)のイタリアの説教史料から声やリテラシーの分析を参考としている。以上の研究背景による課題は、近世村落における村政・生業・生活などの実態解明の上で、基礎となる文書史料に記憶・未文書化情報を含めた、村の情報構造分析の必要性である。

## 2. 研究の目的

研究の目的は、日記本文テキスト化による大規模文書群の目録の再整理、編成記述、情報の構造分析である。これまでの科研において、幕府領肥後国天草郡高浜村庄屋上田宜珍による 30 年間の庄屋日記約 135 万字のテキストを作成した。これをもとに新出文書を含めた文書群全体の再整理を行なった。研究の結果、日記は各文書の索引として機能していることが判明し、本文と現文書の関連性の分析によって、近世村落の村政・生業・生活の実態を明らかにできた。また日記には、現存しない文書写や、口上や事件の経緯である未文書化情報が数多く含まれており、これまで癒傷対策や天草崩れ対応などで実証してきたが、村落史料の情報の構造を考える上で重要な論点となりうる。これらの情報をもとに、目録を編成記述し各文書間の関連性を分析した研究は皆無であり、新しい近世史料の整理・活用、近世村落・情報史研究の提示が可能となる。

## 3. 研究の方法

(1) 対象史料の現状 上田家文書は、肥後国天草郡高浜村の幕府領庄屋上田家の子孫にあたる上田陶石合資会社(熊本県天草市)が所蔵し、上田家資料館にて公開されている。上田家文書の整理は、1958 年熊本県史編纂、1991~95 年天草町教育委員会によって調査が行われ、『天草上田家文書目録』(1996)が完成した。合計 6,954 点と近世村落史料では大規模な文書群である。分類は、土地・宗教・私文書など主題分類で 19 項目あるが、勤役 2062 点等と大まかな分類が多く、目録の項目も表題・年代・形態のみである。文書の一括状況も判明しがたく、現在の史料整理法からみると記述内容が極端に少ない。

(2) 分散文書群 上田家文書は各地に分散しており、これまでに九州大学附属図書館記録資料館檜垣文庫に約 100 点の存在が知られていた。2014 年の上田家資料館における調査で未整理文書約 400 点、2017 年の天草市立天草口ザリオ館の調査で同じく未整理文書 14 箱 1195 点を確認した。これら関連資料を含めて、つぎの点を明らかにする。

(3) 研究方法 上田家文書の未整理文書の目録化を行う。整理済みの上田家文書本体とあわせて、上田宜珍の庄屋在任期 30 年分(寛政元(1789)~文化 15(1818))を中心に、目録を再整理し編成記述を行う。全文テキスト化が終了している 7 代庄屋上田宜珍日記本文の記述と現存文書の関連性を分析し、近世村落史料の情報の構造に関して研究を行う。研究協力者と研究会を実施し、地域情報に関する研究報告を行い、研究成果を学術誌等に投稿する。

## 4. 研究成果

### (1) 史料調査、文書のデータ化

熊本県天草市、熊本市において3回の調査を実施した。

上田家資料館(天草市天草町高浜南、上田陶石合資会社)所蔵上田家文書 上田宜珍庄屋期(寛政元年(1789)~文政元年(1818))を中心に、上田家文書中の勤役、法制、寺社部門の文書を調査選定し、目録撮影を行った。また庄屋日記の見直し、上田宜珍~順一郎庄屋交代期(文化15年(1818)~文政2年(1819))の関連史料を調査・撮影した。19世紀の上田家歴代の日記、上田宜珍の弟で隣村今富村庄屋を務めた上田友三郎日記については、翻刻を行いデータ化した。

天草口ザリオ館(天草市天草町大江)所蔵上田家文書 上田家文書の内分散保管されている文書、14箱中7箱まで711点目録撮影し、971点の目録化が完了した。概要番号で1195点あり、全体の約65%終了した。調査終了した目録については、管理する天草市天草口ザリオ館へ提供した。

熊本県立図書館(熊本市) 県内の自治体史のなかから、上田宜珍同時期の天草に隣接する熊本藩の領民層の日記資料を調査した。

### (2) 共同研究者との研究会 「地域情報、比較史料学研究会」を3回開催。

「上田宜珍庄屋期(寛政~文化)の文書群再考 - 寛政2年孝子万七文書 - 」、「上田宜珍日記における文書の記録」、「高浜村の村民褒賞と文書群の形成」等、上田家文書を中心にした地域情報研究の成果を報告した。その他、関連報告として共同研究者による「近世村落文書の体系性と百姓の年中行事」、「天草上田家日記における気象情報と史料体系」、「天草上田家日記における気象情報と雨乞い儀礼」があり、研究方針や成果の確認、質疑を行った。最終年度はコロナ流行により研究会は開催できなかった。

### (3) 村民褒賞と文書群の形成

近世後期(寛政~文化期)における、天草郡高浜村の村民、孝子褒賞の過程と行状編纂、文書群の形成過程について分析した。寛政期の高浜村の村民褒賞 まず上田宜珍が編纂した「天草年表事録」における褒賞記事を抽出した。「天草年表事録」は文化5年(1808)まで記載が続くが、村民褒賞は寛政期に集中しており、『孝義録』編纂を企図した松平定信の政策の一環と位置づけた。そのなかで、長寿者の織物献上、三子出産、孝子の3件からそれぞれの褒賞過程を検討した。三子出産は生子養育仕法のような藩(島原藩預)の政策と考えられ、藩役人の実地見分が伴うという点で他と異なるが、藩主から褒賞を受けるという点は共通しており、村民褒賞という枠組は有効といえる。

「孝子行状」化された万七、茂作・善作と、同時期に褒賞され「行状覚」が作られた傳四郎の褒賞過程と行状の編纂について分析 各人の褒賞過程では、まず孝子届の提出から候補者を選定し、親族や隣人からの聞き取りによって聞書や覚が日記に記される。つぎにそのなかから「孝子行状」や実体書を編纂する。この聞書と行状を比較すると、文体以外にも相違点が多く、行状では順番を入れ替え、より具体的に感情などを挿入し、読者の共感を得る工夫があった。また跋文により、中野玄琳という他者の視点を付加することにより、褒賞後の顛末、庄屋上田宜珍をも相対化し、孝心を補強する内容となった。孝子の顕彰、発見過程は、近隣の風聞などから端を発し、役所側の調査指示や、村側の簡略な孝子届の提出をへて、その後、候補者が選定され、役所の指示で「御届申上候事」を出す。そのなかから庄屋の能力にもよるが、行状(万七・茂作善作)や、実体書(傳四郎)が作られ、褒賞されていく。

褒賞文書群の形成 まず享和・文化期以降の幕府の『孝義録』編纂と孝女はつ行状の廻達を取り上げた。その後褒賞文書群は、文政9年(1826)孝子調査の際、先例となる島原藩預期の実態・存命調査も同時に行われたため、庄屋上田定行が、村民褒賞関係文書としてまとめた。その後、村民褒賞は、慶応4年(1868)まで継続して実施されていく。寛政前期は、宜珍の庄屋就任期であり、村民褒賞や行状の作成は、この時期の宜珍の行政や思想に関するひとつの展開といえる。

### (4) 庄屋日記と御用書留帳・文書の連携

文化15年(1818)日記と御用書留帳、出勤録に記される文書の写を分類、分析した。日記と御用書留帳には数多くの文書や書状が写されており、唐船漂着など東シナ海に面した大江組の地理的特徴による御用が多いことが判明した。そのなかで江月院一件は、高浜村を越えて大江組、役所・会所・国照寺を巻き込んだ「御用」案件と認識し日記・御用書留帳に書き留められ連携していた。上津深江一件と崎津村一件という村外の案件では、日記と出勤録と別冊を書き分けていた。村の案件の内、出勤した庄屋へ連絡されたのは年貢、疱瘡、災害など重要なものに限定され、一方出勤先の内容は、直接村方に関係のない案件として、日記に記述せず出勤録・別冊に別記し、情報を分類していた。白帆大船の来航注進では、書状や飛脚の情報の経緯を述べ、日記に本文が写された「異船取斗」は、長崎代官支配へと交代した最初の事例として選択して記されていた。これらは、庄屋が収集した情報の大系の実態といえる。

文化15年は、宜珍65歳で高齢者といえる年齢であった。しかし年間61日間の出勤にも従事しており順調に庄屋を勤めているようにみえるが、実は宜珍から順一郎への庄屋交代は、健康上の問題もあったと考えられる。4月18日~12月7日、ほぼ年間を通して、熱、耳や眼、歯など

の病状が悪化した。しかし、このような病氣療養中でも宜珍の日記は続く。最初の病中といえる4月18日～7月10日、日記には文書13件、書状11点、計24点を写し、御用書留帳には32件の触などを書き留めている。7月上旬の白帆船注進関連で書状が多い時期ともいえるが、病気であっても村行政は進んでいく。この状況を可能にしたのは、13年以上の庄屋見習経験をもつ順一郎（30歳）が引き受け、対応したからとも考えられる。この順調な世代交代、庄屋職の継承は、毎日の日記と御用書留帳への文書の写、文書原本への索引・接続など、庄屋の情報の大系が完成していたことも一因といえる。

#### （5）未整理文書の目録化と編成記述

天草ロザリオ館所蔵上田家文書1195点の内、971点の目録化が完了し、上田家資料館所蔵上田家文書本体と内容比較を行った。天草ロザリオ館所蔵上田家文書971点（目録化済）中、年代が明記されている文書は333点（全体の34%）である。特に上田宜珍の庄屋在任期30年分（寛政元（1789）～文化15（1818））を中心に前後を含めた50年間で最も多く、218点と全体の65%を占めた（図1）。またこれに次いで1710、1760年代も多い。上田家文書本体では、1760年以降、6代武弼の代から増え、明和6年（1769）全期間で最高となる。7代宜珍の代で増加し文化2年（1805）にピークとなり、8～10代と徐々に減少し1840年に急減する。1850年代以降再び増加し慶応4年（1868）この時期のピークとなり明治になると急減する。比較すると、6代武弼の1760年台、7代宜珍以降の1780～1840代は同様の現存状況であるが、ロザリオ館所蔵分には1840年代以降の増加がみられない。またロザリオ館所蔵分には、伊勢御師への「御初穂差上目録覚帳」や江月院関連の文書が多く、本体には見いだせないものもあり、各文書群の特徴がうかがえた。今後、ロザリオ館所蔵分全体の目録化を進め、両者の目録を統合、再整理し、上田宜珍の庄屋在任期を中心に目録の編成記述を行っていききたい。

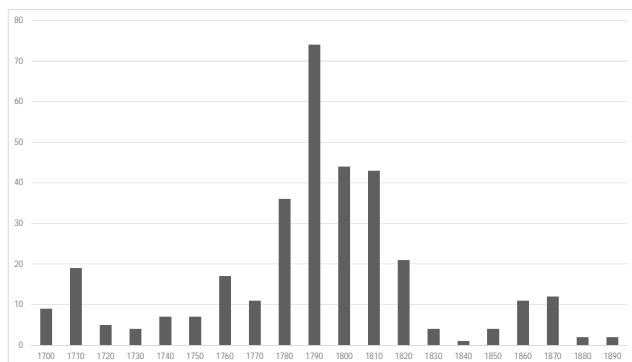


図1 天草ロザリオ館所蔵上田家文書の年代別分布

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 東昇	4. 巻 72
2. 論文標題 近世後期天草郡高浜村庄屋日記と御用書留帳・文書の連携	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告(人文)	6. 最初と最後の頁 219-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 東昇	4. 巻 7
2. 論文標題 熊本県天草市上田家文書調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6. 最初と最後の頁 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 東昇	4. 巻 71
2. 論文標題 近世後期天草郡高浜村における村民褒賞と文書群の形成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告(人文)	6. 最初と最後の頁 219-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 東昇	4. 巻 6
2. 論文標題 熊本県天草市上田家文書調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6. 最初と最後の頁 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 東昇	4. 巻 5
2. 論文標題 天草市上田家文書調査と孝子褒賞文書群	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>上田家文書の地元である、高浜地区振興会『鳩の峰』59 (2021年3月) に、研究成果をわかりやすくまとめた「江戸時代の孝行息子万七 (1)」を掲載した。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	村山 聡  (Murayama Satoshi)  (60210069)	香川大学・教育学部・名誉教授    (16201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------